

令和 6 年 5 月 8 日現在

機関番号：12605

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14064

研究課題名（和文）発達障害のある女子高校生に対する学校適応ガイドブックの開発

研究課題名（英文）Development of a school adjustment guidebook for high school girls with developmental disabilities.

研究代表者

三浦 巧也（Miura, Takuya）

東京農工大学・工学（系）研究科（研究院）・准教授

研究者番号：70735357

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、発達障害（その可能性）のある女子高校生が自己肯定感を滋養することで学校適応が促進されるように、新たな手法・技法を創造することである。そこで、発達の特性上における困難さがある生徒と、援助志向性がある生徒をマッチングさせたグループ活動による心理教育を実施し、心理的柔軟性への理解と気づきが向上することを検証した。その結果、発達障害に起因する困難さが高い生徒は、援助志向性が高い他者との関りによって、自分の思考に巻き込まれ、思考が意識よりも優位に立ち、行動に大きな影響を与えると認知的フュージョンに対する心理的柔軟性を向上させ、新たな自己の内側への気づきを高める効果があると推察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ASDに起因した困難さがある高校生に対して、無理やり他者を交わることを強いる支援は、失敗体験を積み重ねる危険性をはらんでいる。しかしながら、他者との関りが彼女らにとって成功体験、つまり他者に関わってもらってよかったと思える体験を増やしていくことができれば、メンタルヘルスの向上に寄与すると推測された。そこで本研究において、援助志向性が高い生徒とマッチングしたグループによる心理教育を実施することにより、認知的フュージョンに対する心理的柔軟性を向上させ、新たな自己の内側への気づきを高める効果があることが推察され、新たな支援手法・技法が成果として確立されたことは、学術的・社会的意義があったといえる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to create new methods and techniques to facilitate school adjustment by nourishing self-esteem in high school girls with developmental difficulties. Therefore, psychodynamic education was conducted through group activities in which students with developmental difficulties were matched with students with assistance orientation, and it was verified that the understanding and awareness of psychological flexibility was improved. As a result, it was inferred that students with high difficulties due to developmental disabilities, by engaging with others who are more assistance-oriented, improve their psychological flexibility against cognitive fusion, such as being involved in their own thinking, thoughts dominating over awareness and having a greater influence on their behaviour, and increase their awareness of a new inner self. It was inferred that this would have the effect of increasing new inner-self awareness.

研究分野：特別支援教育

キーワード：女子高校生 発達障害 援助志向性 協同学習 自己肯定感 心理的柔軟性

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、発達障害のある女子高校生に対して学校適応を促進する支援体制・技法を新規開発・実施し、学校生活上で、彼女らがより自分らしく過ごしやすくなることである。近年、彼女らへの支援では、男子生徒の支援策を適用しており、女子生徒特有の課題へのアプローチが確立されていないことが課題としてあげられている。これまでに発達障害のある女子高校生に関する調査で明らかになっている事は、当該女子高校生は男子生徒に比べて周囲から気付かれにくく、外部からは潜在化することである。彼女らは、失敗を積み重ねると自己肯定感が低減し二次的な心理的問題を誘発しやすい。さらには自己不全感に悩み、場合によっては学校不適応による中途退学や不登校・ひきこもりといった問題行動を表出しやすい。以上の日本国内の調査・事例研究は、課題を顕在化したという一定の成果を上げている。しかし、その課題解決に対する実践的な研究は、ほとんど行われていない。つまり、発達障害のある女子特有の新たな生き方が社会的に模索され始めたが、当該女子高校生に対する有効な支援方法が確立していない事が大きな学術的課題となっている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、発達障害のある女子高校生を対象に、彼女らの学校適応を支えるための支援体制・技法の構築を目標とした『発達障害のある女子高校生に対する学校適応支援ガイドブック』を開発し、その有効性・運用性を検証することである。

3. 研究の方法

プロジェクトA：発達障害のある女子高校生の学校適応に関する特徴について、性別、発達段階別（中学生との差異）、進学率（キャリア）別による比較を通して、特有とされる実態を検証する。

プロジェクトB：事前実践として、クラスの生徒が抱く援助志向性と特別な支援のニーズを把握するため、ASDやADHDに起因する困難さを測定する。その後、ACT（Acceptance and Commitment Therapy）を援用した「考えていることに気づくという、自分の内側への気づきを高める」プログラムを実施し、効果を検証する。次に、プログラムの反省点を反映し、本実践研究として、援助志向性が高い生徒と特別な支援のニーズが高い生徒をマッチングさせたグループを構成し、プログラムの効果を検証することにした。

4. 研究成果

ガイドブックの作成には至らなかったが、以下の研究成果を得ることができた。
プロジェクトA：思春期の中高校生のメンタルヘルスの状態を測定する尺度を作成した。その結果、女子生徒の方が男子生徒よりも、メンタルヘルスの不調を訴える人数が多く示された（三浦ら、2021）。発達障害のある女子高校生の学校生活上の困り感の実態について調査を行った結果、当該女子高校生は、障害特性等による症状や行動そのものへの支援に加えて、特性によって引き起こされる心理的問題の軽減が必要となることが示唆された（三浦ら、2020）。また、女子高校生は、ASD（自閉スペクトラム症）に起因した困難さを強く抱く場合、共同的な作業や相手の話を積極的に聴く意欲が低く、これらの他者との関係性への意思を媒介として援助志向への動機を下げてしまうことが示唆された（三浦ら、2022）。加えて、女子高校生はASDに起因する困難さが高いほど、援助の志向性や援助するために必要なスキルの獲得度合い、そして、他者と協同して取り組もうとする志向に対する有効性や貢献性は低下することが示された（三浦、2024）。また、女子高校生において、ASD困り感が高い場合、PMDD（月経前不快気分）が媒介して、学校の生活や勉強に支障をきたすことが示された。また、ADHD（注意欠陥多動症）困り感が高い場合、PMDDが媒介して、学校の人間関係に支障をきたすことが示された（Miura & Hashimoto, 2023）。さらに、発達障害のある女子大学生に対して、対人関係の困難さについて調査を行った結果、過剰な自己犠牲的な発言がみられた。特に、異性との関係において心理的に抗拒不能な状況に陥りやすく、性被害に発展するリスクが示された（三浦、2022）。異性との関係において心理的に抗拒不能な状況に陥りやすく、性被害に発展するリスクが示された発達障害（その可能性）がある女子高校生の性被害を防止し、彼女らが主体的に将来の自分たちの生活や健康に向き合うことが今後の課題であることが示唆された。

プロジェクトB：本実践研究におけるグループワークでは、ASDやADHDに起因する困難さが高い生徒は、援助志向性が高い他者との関りによって、自分の思考に巻き込まれ、思考が意識よりも優位に立ち、行動に大きな影響を与えるといった認知的フュージョンが軽減した。実際、ASDやADHDに起因する困難さがある生徒の事例では、プログラムの実施を通して、「マイナスな考えや、いやな気持ちが続きやすい」「いろいろ考えすぎて、行動にうつせないことがある」といった認知的フュージョンに対して、心理的柔軟性を発揮し新たな認知や行動へ繋がることを示唆され

た。そして、自由記述の感想より、他者から積極的に関わってもらった体験を通して、これまで以上に客観的に自分の考えを見つめることの大事さにも気づくことが出来たのだと推測された。このことから、本実践研究で作成したプログラムは、ASD や ADHD に起因する困難さがある生徒において、援助志向性が高い生徒とマッチングしたグループを構成した上で実施することにより、認知的フュージョンに対する心理的柔軟性を向上させ、新たな自己の内側への気づきを高める効果があると推察された。プログラム全体として、体験の回避や認知的フュージョンに対して、参加者全員が実証的に心理的柔軟性を高められるようなプログラムの内容を精査することが、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 竹達健顕・橋本創一・日下虎太郎・三浦巧也	4. 巻 14
2. 論文標題 高等学校における発達障害のある生徒が転退学に至ってしまうケースの要因構造分析とその教育支援の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本学校心理士会年報	6. 最初と最後の頁 100 - 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三浦巧也	4. 巻 9
2. 論文標題 高校生向け大学移行準備スキルに関する調査研究 発達障害のある学生を踏まえて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青山学院大学教職研究	6. 最初と最後の頁 115-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 日下虎太郎・橋本創一・三浦巧也	4. 巻 62
2. 論文標題 高校生に向けたストレスマネジメント教育（SME）スタートアッププログラムの開発	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 学校保健研究	6. 最初と最後の頁 385-397
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 日下虎太郎・橋本創一・三浦巧也・渡邊真帆・竹達健顕・工藤 浩二	4. 巻 43
2. 論文標題 高校生の「コーピング資源」についての検討 - 養護教諭の視点からの支援ニーズの高さとの関連 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科論文集 学校教育学研究論集	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹達健顕・橋本創一・日下虎太郎・渡邊真帆・三浦巧也	4. 巻 19
2. 論文標題 高等学校における発達障害・精神疾患（疑いを含む）のある生徒への校内支援体制に関する調査研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達障害支援システム学研究	6. 最初と最後の頁 17 23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦巧也・杉本優佳・佐藤速人・日下虎太郎	4. 巻 62
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症流行下における中高校生のメンタルヘルスの実態把握 - 思春期精神健康調査（AHQ-10）作成を通して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東京私立保健研究会会誌	6. 最初と最後の頁 24 33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三浦巧也・宮崎早苗・松崎信也・杉本優佳	4. 巻 39
2. 論文標題 男子高校生のストレスコーピングとマインドフルネス・ワークとの関連性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 芝浦工業大学附属中学高等学校教職員誌 鹿車	6. 最初と最後の頁 42 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三浦巧也・橋本創一・竹達健顕・日下虎太郎
2. 発表標題 高校生の発達特性に起因する困難さが援助志向性に与える影響
3. 学会等名 日本発達障害学会第57回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三浦巧也・田口禎子・田中里実・日下虎太郎・竹達健顕・橋本創一
2. 発表標題 女子高校生の発達障害特性に起因した困り感が月経前の不快な気分におよぼす影響
3. 学会等名 日本発達障害学会第56回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 尾高邦生・橋本創一・三浦巧也・李受眞・田中里実
2. 発表標題 軽度知的障害者・発達障害者におけるキャリアカウンセリング技法の導入
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三浦巧也・橋本創一・竹達健顕・日下虎太郎・杉岡千宏
2. 発表標題 高等学校や私立学校の児童生徒の学校適応を支える新たなシステムを模索する
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回総会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 三浦巧也：水谷哲也・朝岡幸彦（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 筑波書房	5. 総ページ数 144
3. 書名 学校一斉休校と子どもたちのメンタルヘルス（1）一斉休校後の学校再開（分散登校）時における中高校生のメンタルヘルス：学校一斉休校は正しかったのか？ 検証・新型コロナと教育（持続可能な社会のための環境教育シリーズ 9）	

1. 著者名 三浦巧也・川池順也・渡邊貴裕・橋本創一・尾高邦生・霜田浩信・熊谷亮・今枝史雄・田口禎子・杉岡千宏・細川かおり・真鍋健・大伴潔（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 232
3. 書名 院内学級、訪問教育、教育支援センター（適応指導教室）、フリースクールなどの支援の実際：別支援学校・特別支援学級・通級による指導・通常の学級による支援対応版 知的障害 / 発達障害 / 情緒障害の教育支援ミニマムエッセンス 心理・生理・病理、カリキュラム、指導・支援法	

1. 著者名 橋本創一・三浦巧也・渡邊貴裕・尾高邦生・堂山亞希・熊谷亮・田口禎子・大伴潔	4. 発行年 2020年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 238
3. 書名 教職課程コアカリキュラム対応版キーワードで読み解く特別支援教育・障害児保育&教育相談・生徒指導・キャリア教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------